

## 二十五 東洋史研究への発足

私は、中国旅行によって今までにかつて見なかった大きな文化の存在を知り、ここに渡欧の初志を翻して、東洋史の研究に没頭しようと決心した。従って私は、『ディナミック』の続刊を断念せざるを得なかった。故に『ディナミック』誌上に次のような言葉を残してこれを廃刊した。

「……」本誌を創刊してから丁度満五箇年になる。その間に於ける世の中の変化や私達の経過して来た道をかへり見ると、まことに悩ましい夢でもあつたやうに思はれる。

オツチヨコチヨイのお調子やの騒がしい社会運動に次いで保守的反動のうねりが起る。満洲事件が勃発する。五・一五事件が襲来する。それを模倣した、或はそれを利用する様々な妄動、策動が行はれる。社会不安はかうして増々深刻さを加へるばかり。世を挙げて兇夢に悶へてゐるとしか思はれない。世は激動の五箇年であつた。

◇ 私 は昭和二年にこの千歳村に來たが、その時の志望は実に大きかつた。様々な障碍によつてその一つにも着手することができなかつたが、その思案は今日も決して誤つてはゐないと思ふ。私自身には実現できなかつたが、世の中は浅薄ながら私の思案した方向に少しばかり視線を向けて來た。

◇ 今から十二年前、ヨーロッパから歸つて來て、最初に私の唱へたことは「土に還れ」といふことであつた。はでやかな社会運動の盛んな最中に「土民生活」の提唱なぞを敢へてしたことは些さか突飛であつたかも知れない。だが併し、農村問題のやかましい今日から見ると、それは可なり先見を誇つてもよい思想であつた。また今日、大臣だの政治家だの有志だのによつて農村匡救策が騒がれてゐながら、それが一時の村雨の如く過ぎ去つて、跡に干からびた田園が取り遣されるであらうことを思ふと、我々の為さねばならぬ事業はこれからだとも感じられる。

◇ 私が此地に來て、二反の土地を小作して半農生活を始めたのは、こゝを中心にして広い農村的共学組織を設ける為であつた。「……」然るに好事魔多しで、其志望は片鱗をも現はさず今日に至つた。

◇ 『ディナミック』の創刊が思ひ立たれたのは実は右の希望が挫かれた空虚を充すためであつた。

◇ 『ディナミック』を通じて新しい多くの友達ができた。たゞ『ディナミック』に現はれる私の文

章は極めて稀れにしか私の土民思想を表現してゐなかつたので、読者の多くは必ずしも私の生活に共鳴し又は私の思想を実現しようとする者ではなかつたであらう。私の『ディナミック』紙上に書いたものは多く科学的又は哲学的研究であつた。それは私がペンを以て道徳を説き、正義人道を唱へることを欲しなかつたためである。宗教家のやうに、権威あるものゝ如く道徳を説くほど非道義なこととはないと考へた結果であつた。

自分の知識、自分の芸術を發表して、世の批評を求め、他の共鳴を誘ふことはよい、併し自分の道義を権威を以て諸人に説くことは、強権主義の第一歩である。かうした精神的強権主義は多数の同志を集めて一時景気のよい運動を誘起すべく極めて有効ではあるが、それは私の慎んで避けなければならぬと考へたことであつた。こゝにアヂターとエデューケーターとの相違がある。煽動者たるよりも教育者とならねばならないと信じた私が、かうした態度をとつたことは寧ろ当然であつたと思ふ。此『ディナミック』を創刊した頃は、余りにアヂばかりで又は浅薄な流行ばかりで、深い思想的耕作が稀であつた。今日の世相では思想もアヂもともに萎微して振はないが、深く根ざされた思想の生命があれば、それは一陽来復の時を得て必ず勃興するであらう。私は常に同志を百年の後に求める心持で、ものを書いて来た。否、常に心底を永遠に据えて万事を割出して来た。永遠は何時でも現実である筈だが、其現実が或る波動に蔽はれる時は、表面に見える波動のみが現実である如く思はれる。社会問題が騒がしくなると或る特殊な社会現象のみが人生の現実であるかの如く見える。そこから多くの過誤が湧いて来るのである。革命が多くの場合に正道から逸脱するのは

その為めである。短かい歴史をしか持たない日本の社会運動も、かうした過誤を幾度犯したことか。ロシア革命が横道にそれて今日の有様を呈してゐるのも其ためである。



そこで私はこの過誤をなるべく避けるための一方法として歴史と歴史理論の研究が必要であると考へた。それに私は久しい以前からダーゲン流の進化説に疑惑を懐いてゐた。それに調子を合せたマルクスの歴史理論に対しては全然信を置くことができなかつた。然るに偶々オーギュスト・コントの『実証哲学』を翻訳して彼の歴史的社会学に頗る啓発されるところが多かつた。コントの歴史理論は近世社会主義に確乎たる基礎を与へたものと言はれるが、それは唯物史観とは全然基調を異にするものである。

それから更に私に歴史研究の興味を与へたところの最大の恩人がある。それは英国のエドワード・カアペンターと仏国のエリゼ・ルクリュとである。カアペンターの『文明論』は寧ろロオマンチックであると言へるであらうが、その深遠な人生観に基く歴史論は遙かに俗流をぬいてゐる。ルクリュの大著『地人論』は宇宙觀の歴史論である。時間的及び空間的の無限界に生活する有限無常な人類の歴史を書いたものである。古今独歩の地理学者としての彼の眼に映じた世界各地の人類の歴史には動かすことのできない地理的天文的影響が伺はれる。地球の表面の各部分、各時代に於ける多種多様な人類生活を掌中に翻へして示すが如く書かれたのが『地人論』である。私の歴史観が是等の書によつて限りなく育まれたことは今更言ふまでもない。

かくて私は『ディナミック』紙上に屢々歴史理論の研究を発表した。私自身の創意が左程に多くある訳ではないが、一方にマルクス主義の歴史理論が猛威を振って流行してゐる際なので、自然それに対応するの態度にて書かれた点も少なくなかつた。それにアナリスチックな立論を明確にする積りで、特にその点を高調した傾きもあつた。そして兎も角も、それは遂にまとめられて『歴史哲学序論』となつた。

それは勿論序論であつて、これから私の研究は本論に這入るのである。そこで、その研究を一層深くするために私は昨年渡欧を企てたのであるが、旅券が取れないので、一頓挫を来し、更に渡支して親しく支那文化に眼を注ぐに至つて、私の興味は俄然一回転した。即ち私は従来知らなかつた一大文化世界、一大人類史といふものに全心を奪はれるに至つた。支那の諸友の助力を受ければ日本の旅券は無くとも渡欧は容易であつたが、私は感激と興奮とを懐いて日本へ歸つて来た。支那を中心とした東洋史の研究に没頭したい為であつた。

僅か三ヶ月間の支那滞在ではあつたが、私はそこに広大な驚異的特殊世界を発見した。それは真実の土民生活(デモクラシー)を根深く持つた、そして太古から芽をふいて今尚ほ元気を失はない、不思議な社会生活である。支那の文化の基礎は、数千年來その豊饒な生産力を發揮し続けてゐる大無辺の黄土にあることが眼を打つやうに私の前に現はされた。「井を穿りて飲み、地を耕して食

ふ、帝力我に何かあらんや」といふ古語は、実にこの黄土に於てのみ唱へ出される言葉であることが分つた。「帝力」といふことは政治的司宰たる天子をも意味するであらうが、寧ろ宗教的天帝を意味すると解すべきであらう。拜天の宗教は決して支那太古の民衆の信仰ではなく、寧ろそれは貴族或は権力者の宗教であつて、民衆は却て「后土」を礼拝した。支那太古の民衆の精神を支配したのは天ではなくて地であつた。漢の王朝が頻りに后土礼拝の祭を行つて民心の収攬に努めたことは意味深い歴史事実である。かうした歴史事實は民衆の信仰が如何に強力に「后土」に結び付いていたかを証明するもので、その生活は実に世界無比なる民主思想、土民思想を表現したものである。この根本生命を把握しなければ、支那の文化も、四千年の歴史も、王道の思想も、了解することは出来ない。

この黄土の国に来て、この后土礼拝の民衆を統治すべく、西方夷人たる禹の苦心したことはどんなであつたか。同じく西來の秦の始皇の地位がどんなに困難であつたか。周の文、武、周公等によつて樹てられた王道思想は、実にこの土民社会を統治するための便法に過ぎなかつた。孔子の儒教はその便法に宇宙的原理を基礎づけたものである。独り老子のみは、この黄土の民衆の根深い生活の宇宙的意義を看取して一種の力強い人生哲学を樹立した。

かうした考へが浮んで、私は盲目の眼が開いたほどの喜びを感じて、東洋文化史の研究に一心を投げ込んだ。今もそれに没頭してゐる。歴史事実を精細に研究すればするほど、黄土と民衆との結

合した偉大な威力に打たれると同時に、今日までの学者達の書いた歴史が、一々皆改訂されねばならぬものであることを思はない訳には行かない。多くの歴史は時の権力者を中心として書かれたものだからである。それは流れてゐる水の底を見ないで水面の波浪のみを見たものである。波浪が立てば立つほど底は見えなくなるのである。

かう考へて自分で独自の歴史を書いて見たいと発憤した。併し不幸にして私には充分の健康がない。其上に生活のために大部分の時間を奪はれる。どう考へても今私の目ざしてゐる研究を私の一生に成就することは出来さうでない。そして成るべく労力の経済を計つて、できるだけ前進することを心がけることに決心した。今度『ディナミック』を休刊するのもそれが、一理由をなしてゐる。

満五箇年の変遷を顧みると世間も自分も様々に動いてゐる。この小さな『ディナミック』を顧みても多少の感慨を禁じ得ない。たゞ永遠性を把握した歴史、宇宙性を持った歴史、民衆の中に根を持つてゐる社会生活の真実の歴史、さうしたものを創作して見たいといふ念願が私の一切を決定するのである。かうした歴史は決して今の世に公けに出来ないものであるだらう。私は何時も永遠を思ふが故に、時間を限つた成業を願はない。

(第五十九号 昭和九年十月一日)

こうして私は『ディナミック』の発行を止めた。そして東洋文化史の研究に没頭することになった。

## 二十六 研究生生活

東洋文化史の研究に没頭するつもりで感激を以て中国から帰ってきた私は、さて日本に帰つてみると俗用が多くて研究などに没頭してはいられなかつた。しかし日本や中国の学者達の書いたものを見て、修正すべき点が多く存する事だけは発見した。

この頃、即ち昭和十年、私は斎藤昌三氏の書物展望社から随想集『不盡想望』を出した。この書は当時三、四年間の間に諸紙に発表したものの中から選んだもので、巻頭にはカーペンターの青年時代の作である水彩画をかかげた。翁自筆の絵はこれが唯一のもので、まことに尊い形見である。『不盡想望』という書名について私は序文で次のように書いてゐる。

『不盡想望』はこれを「盡きぬ想望」と読んでも、「想望を盡さず」と読んでも、よろしからう。けれども此書名本来の意味は別にある。それは「石川や浜の真砂はつきるとも世に泥棒の種はつき、